

養護施設児の学業不振に関する研究

或養護施設入所児の事例研究

研究第6部 権平俊子

I はじめに

学業不振の実態と改善に関する研究「第1報 養護施設児の算数学力の分析」をプロジェクト研究で研究し、報告したが、或施設の御厚意により、入所児につき、詳細な資料を提供して頂くことが出来た。数が少ないので統計的処理による分析ではなく、事例研究を行って、養護施設児の算数科に於ける学業不振の実態を探る一助になればと考えて本研究を行った。

II 目的

徳島県養護施設児に対して、算数学力診断テストを行い、その結果につき検討を加えて報告した。その中の1養護施設入所児につき、入所年齢、佐野良五郎案の学業不振児の原因的チェックリストを8タイプにつき行った結果及び施設内の様子、算数科の学校での成績評価などを検討して、事例研究を算数科の学業不振に焦点をあて行い、その原因などを探り、その改善に役立てたいと思う。

III 方法

徳島県内1養護施設入所児、小学生20名、中学生11名、計31名（男19名、女12名）につき、入所年齢を乳児院から入所した者、3歳以下、3歳1か月-6歳、6歳1か月以上に入所した4群に分けて、算数学力診断テストの結果をその学年の養護施設児平均と比較し、その学年の平均パーセント値の10%以上のマイナス・プラスの者につき、検討してみた。

佐野良五郎案の学業不振の原因的分類のチェックリスト、A、B、C、D、E、F、G、H、タイプにつき、施設職員がチェックした結果と算数科の学校に於ける成績評価を参考に加え、知能指数、算数学力診断テストの結果とを比較検討して、事例研究を行う。

IV 結果及び考察

1. 対象児は養護施設入所児

小・中学在学中の者31名である。対象児の内訳は、小学校在学児 20名（男12名、女8名）中学校在学児 11名（男7名、女4名）である。

2. 対象児の知能指数

対象児の1名を除き、30名は知能指数が分っている。知能指数の分布は図1で示した。徳島県、全養護施設入所児、小・中学校在学児で知能指数が分っている者の164名の平均は100.9であり、対象児の平均98.6と比較すると大差なく、平均知能群とみなすことが出来る。

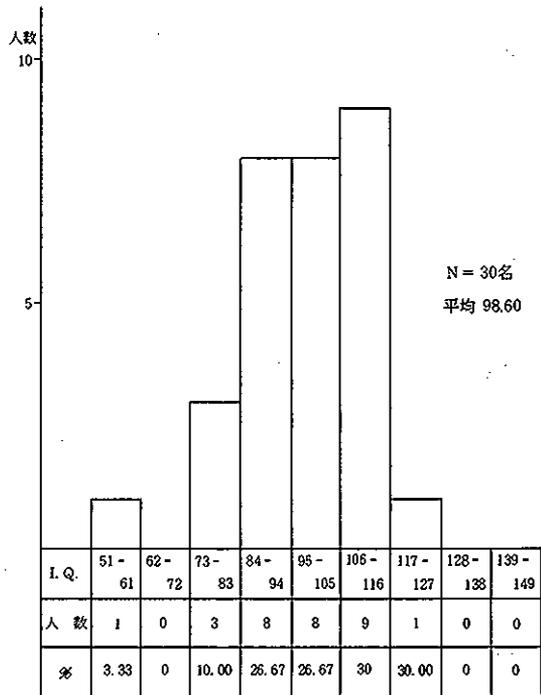


図1 対象児の知能指数の分布

3. 入所年齢別に分けてみた対象児

対象児につき、養護施設に入所した年齢により次のような4群に分けた。乳児院から入所した者、3歳0月以下、3歳1か月から6歳0月迄、6歳1か月以上で入所者とした。

入所年齢別に分けて、表1, 2, 3, 4で示した。全領域欄では、算数学力診断テストの結果の全領域の得点をパーセントで示したものである。平均との差は、養護施設児のその子の該当学年の全領域の平均値と比較した数である。平均との差は、その学年の平均値との差10%は変動なしとみた。即ち、平均値の10%以上の変動につき、平均よりプラス、マイナスと考えることにして表示してある。算数評価は学校の算数科の成績評価で、算数学力診断テストを行った同時期、1986年2学期の算数科の評価を5段階評価2の場合は5分の2、3段階評価で1の

場合は3分の1というように記入した。

(1) 入所年齢別からみた知能指数

入所年齢別に4群に分けて、知能指数をみると、6歳以上で入所した群が一番高く平均が104.9で全養護施設児の平均100.9より高く、標準偏差値が7.52で4群の中で一番小さい所から知能指数値のばらつきも小さいと言える。3歳1月-6歳0月で入所した群は知能指数が不明の者1名を除いてみると、平均が一番低く94.0で標準偏差値が21.37で一番高い所から知能指数値のばらつきが大きいと言える。乳児院から入所した群は知能指数の平均96.90、標準偏差値11.87、3歳0月以下で入所した群は知能指数の平均97.14、標準偏差値10.30でこの2群はほぼ同様である。

(2) 入所年齢別からみた算数学力診断テストの結果

表1 入所年齢 乳児院より入所した者(10名)

	性別	学年	入所年齢	全領域	平均との差		算数評価	I, Q,
1	男	中3	乳	29.9%	- 1.84	±	2/5	94
2	男	中3	乳	14.7	- 17.04	-	1/5	73
3	女	中3	乳	42.4	+ 10.66	+	2/5	94
4	男	中2	乳	47.6	+ 19.61	+	3/5	94
5	男	中2	乳	45.7	+ 15.93	+	3/5	81
6	男	中1	乳	48.7	+ 11.14	+	2/5	107
7	男	小6	乳	35.6	+ 13.35	+	3/5	105
8	男	小5	乳	74.5	+ 40.07	+	3/5	114
9	女	小3	乳	22.3	- 22.30	-	2/5	106
10	男	小2	乳	43.6	- 19.68	-	1/3	101
全領域が学年平均と比較して±の者 1名 10.0%							I. Q. 平均	96.90
" +の者 6名 60.0%								
" -の者 3名 30.0%								
							S. D.	11.87

表2 入所年齢 3歳0月以下で入所した者(7名)

	性別	学年	入所年齢	全領域	平均との差		算数評価	I. Q.
11	女	中3	1歳7月	23.2%	- 8.54	±	2/5	93
12	男	中2	3歳0月	20.3	- 9.47	±	3/5	81
13	女	中1	2歳4月	40.4	+ 2.75	±	2/5	93
14	女	小4	1歳9月	32.5	- 1.84	±	2/5	96
15	*女	小3	2歳6月	9.9	- 34.56	-	3/5	94
16	男	小3	2歳4月	63.4	+ 18.94	+	3/5	108
17	男	小2	2歳6月	55.4	- 7.88	±	1/3	115
全領域が学年平均と比較して±の者 3名 42.9%							I. Q. 平均	97.14
" +の者 1名 14.3%								
" -の者 3名 42.9%								
							S. D.	10.30

*は特殊学級入級児で算数評価は同学級内のものである。

権平：養護施設児の学業不振に関する研究

表3 入所年齢 3歳1月-6歳以下で入所した者(6名)

	性別	学年	入所年齢	全領域	平均との差		算数評価	I. Q.
18	女	中2	4歳11月	32.0%	+ 2.23	±	3/5	95
19	女	小5	4歳0月	52.0	+ 17.57	+	2/5	125
20	*男	小3	5歳1月	18.0	- 26.46	-	1/5	99
21	男	小2	3歳8月	79.4	+ 16.12	+	2/3	93
22	男	小2	4歳7月	77.4	+ 14.12	+	2/3	不明
23	*女	小1	6歳0月	0	- 42.17	-	1/3	58
全領域が学年平均と比較して±の者 1名 16.7%							I. Q. 平均	94.0
" +の者 3名 50.0%								
" -の者 2名 33.3%								
*は特殊学級入級児で算数評価は同学級内のものである。							S. D.	21.37

表4 入所年齢 6歳1月以上で入所した者(8名)

	性別	学年	入所年齢	全領域	平均との差		算数評価	I. Q.
24	男	中1	7歳7月	18.2%	- 19.45	-	2/5	110
25	*男	小6	9歳3月	0	- 22.25	-	1/5	95
26	*女	小5	8歳0月	24.7	- 9.73	±	2/5	94
27	男	小5	9歳10月	78.8	+ 44.37	+	4/5	114
28	女	小3	7歳0月	33.7	- 10.76	-	3/5	105
29	男	小3	7歳0月	72.1	+ 27.84	+	3/5	114
30	男	小3	8歳7月	54.3	+ 9.84	±	3/5	108
31	*女	小2	7歳3月	51.4	- 11.88	-	1/3	99
全領域が学年平均と比較して±の者 2名 25.0%							I. Q. 平均	104.9
" +の者 2名 25.0%								
" -の者 4名 50.0%								
*は特殊学級入級児で算数評価は同学級内のものである。							S. D.	7.52

算数学力診断テストの結果の全領域につき、養護施設児の平均と比較してみると、乳児院から入所した群は±が10%、+が60.0%、-が30.0%で+が一番多く、次いで3歳1月-6歳0月で入所した群は±が16.7%、+が50.0%、-が33.3%である。3番目は6歳1月以上で入所した群で、±が25.0%、+が25.0%、-が50.0%である。4番目は3歳0月以下で入所した群で、±が42.9%、+が14.3%、-が42.9%である。

以上の結果から、乳児院から入所した群が3歳1月-6歳で入所した群と大きな違いではないが算数学力診断テストの結果は高い。一般に乳児院から入所した者はホスピタリズムの関係などから、言語発達など知的能力が劣る傾向があるとも言われてきたが、現在の乳児院は赤ちゃんの養護も十分に出来るようになってきている。そのため、親が養育しても、措置理由にあるような、両親の離婚、両親の蒸発、貧困など十分な養護が受けられないような環境で育てられてきたということが想像できる

ので、親の許で養育されたということが、養護施設で養育されるより必ずしも子どもにとってよい環境であったとはいえないと考えられる。6歳0月以上で入所した群は高いレベルの者と低いレベル者との差がある。入所までどのように養育されたかでその違いが出るのではないかとと思われる。後で事例についてその点を検討してみたい。

(3) 学校の算数科の成績評価

学校に於ける算数科の成績評価について算数学力診断テストを行った同時期の1986年2学期のを表に示した。特殊学級入級児は同学級内の評価であるので除き、5段階評価を一般にやられているように三段階評価にして、4群の平均をみると、乳児院から入所した群が1.4、3歳0月以下で入所した群が1.3、3歳1月-6歳0月で入所した群が1.8、6歳1月以上で入所した群が2である。乳児院からの群には特殊学級入級児がいない、他は特殊学級入級児がいる。6歳0月以上で入所した群には入級児が3名いる。そのためこの数だけで各群の算数

科の成績の上・下を判断することは出来ないが一応の参考としてみた。6歳以上で入所した群はこの結果からも、算数科に於て、出来る者と出来ない者がいると言える。

算数学力診断テストの結果、全領域が養護施設児群の平均と比較して変りない者と低い者で学校での算数科の成績評価が最下位でない者を見ると、特殊学級入級児を除き、コード番号、⑫、⑬、⑳、㉑が5段階評価の3で①、⑨、⑪、⑭、⑯、㉒が5段階評価での2である。平均と比較し変りない者と高い者では算数科の成績評価が最下位の者は⑩1名だけである。この結果から、算数学力診断テストの学校在児群の平均の方が中学1年を除き養護施設児群より高い結果がでていいる。養護施設児の平均より低くでている者の中に算数科の成績評価が最下位でない者が3名いて、平均との比較で変りない者、高い者1名を除きすべてが成績評価では最下位ではないということから、算数学力診断テストの結果が低かった者の中にも、算数科の学校の成績は低くない者もいる。また、平均と変りない者、高い者は学校に於ても算数科の成績が低くないということが出来る。この結果から算数学力診断テストが平均以上であれば、先ず心配はないが、低くでた場合にはもう1度検討してみる必要があろう。

4. 佐野良五郎案学業不振の原因的分類のチェックリストの結果及び事例研究

本調査は「学業不振児」(小学生のからだと心の診断)佐野良五郎著の中の調査に沿って行い、判定も著書の通りに行ったものである。養護施設の児童指導員、保母が対象児について記入し、集計したものである。この調査項目は身体的原因のチェックリスト、A 虚弱児の特徴、B 過敏性体質児の特徴、C 起立性調節障害症、D 微細脳損傷の徴候、E 視力と聴力のチェック、心理的原因のチェックリスト、F 自立心未発達型、G 情緒障害型、H 学習習慣不確立型、の8タイプにつき各10項目があり、対象児につき、各項目毎には、いいえでチェックして、項目にはいと答えたら1点とする。8タ

表5 タイプ別の評価

タイプ別	正常範囲	要注意	異常
虚弱児の徴候(A)	3点以内	4~5点	6点以上
過敏性体質児の徴候(B)	3点以内	4~5点	6点以上
起立性調節障害症(C)	3点以内	4~5点	6点以上
微細脳損傷の徴候(D)	3点以内	4~5点	6点以上
視力と聴力のチェック(E)	2点以内	3~4点	5点以上
自立心未発達型(F)	3点以内	4~5点	6点以上
情緒障害型(G)	3点以内	4~5点	6点以上
学習習慣不確立型(H)	5点以内	5~6点	7点以上

表6 チェックリストにより要注意、異常を示した個人別項目

入所年齢	コード番号	要注意	異常
乳児院より	2	F	G, H
"	3	D, H	E
"	8	H	
"	10	F	H
3歳 - 6歳	18	C	A, E
"	21	F	
"	23	F	D, E, G, H
6歳1月以上	25	E, G, H	
"	29	F	
"	30	D	

註 3歳以下で入所した群には該当児なし

タイプの評価は表5で示した。対象児31名について行った結果、各タイプで要注意、異常と出た者については、表6で示した。

1) 要注意・異常とチェックされた者の事例研究

要注意・異常の項目数の多い者を見ると、㉒ 異常2 要注意1である。㉑異常4、要注意1である。この2人とも、知能指数が他の子どもに比較して低い、G情緒障害型、H学習習慣不確立型、D微細脳損傷の徴候、E視力、聴力のチェックである。これらの項目をみると、知恵おくれの子が示す行動がいくつか入っている。そのため、異常にチェックされたのか、また、情緒障害児や視力、聴力に問題のある子は、一見知能の発達がおくれているようにも見え、また知能検査にのりにくいため知能指数が低くでることもあるので、その関係については判断を要すると思われる。

㉑はA虚弱児、E視覚と聴力チェックが異常であり、C起立性調節障害症が要注意である。この子は全領域の結果は平均であり、算数科の学校での成績評価も5段階で3をとっている。国語は3、英語3をとっているところから、知能指数95ということを含せて考えると、学業不振ではないと思われる。

㉒ E視覚と聴力のチェックに異常を示し、D微細脳損傷の徴候、H学習習慣不確立型が要注意である。全領域は平均以上であり、学校の成績評価は5段階評定で算数2、国語2、社会2、英語2、理科3であり、知能指数94であるところから、学業不振とは考えられない。施設の職員によると反抗的で素直さが無いといわれている。

勉強以外のことに多く時間がとられる。復習、予習を毎日やらない、何時も好きな学科だけ勉強するなどの項目にチェックされているところから、性格的な問題が学習態度にも現れているのではないと思われる。

㉔は知能指数95あるのに全領域は0で特殊学級に入っている、E視覚、聴力のチェック、G情緒障害型、H学習習慣不確立型が要注意である。9歳3か月で入所しているが、措置理由は父が酒を飲んで暴力をふるうため、母が家出をしたということで、入所までの環境が悪く、勉強ができるような家庭ではなかったようである。㉔は㉔の妹で知能指数94でやはり特殊学級に入級している。㉔も妹であるが学校の算数の成績は5段階の3である。下へいく程、言い換えれば、低年齢で施設に入った子どもの方が学業不振になっていない。

㉔H学習習慣不確立型、㉔㉔F自立心未発達型、㉔D微細脳損傷の徴候が要注意であるがすべての子が全領域は平均以上であり、学校での算数科の評価は真中の段階である所から学業不振ではないと言える。

2) 要注意、異常にチェックされていない者

要注意、異常にチェックされていない者についてみると、㉔知能指数115、㉔知能指数99、㉔知能指数94、㉔知能指数99で算数学力診断テストの全領域で平均より低く、学校の成績も最下位に評定されており、㉔㉔㉔は特殊学級に入級しているので、学業不振と言える。

㉔は知能指数114であり、算数学力診断テストも全領域で78.8%と学校在学児より高い。学校の成績は5段階で国語4、社会4、算数4、理科4、音楽3、図画工作2、家庭3、体育3と成績もよい。㉔は㉔の弟である。D微細脳損傷の徴候が要注意であった。知能指数114で全領域は72.1%と学校在学児の平均より高く、学校の成績は5段階で、国語3、社会4、算数3、理科4、音楽4、図画工作2、体育4である。この兄弟は兄が9歳10月、弟が7歳で入所している。措置理由は母親が父親の暴力にたまりかねて家出をした、父親は職場を止めて出稼ぎにいったので、元の職場の社長が措置するよう依頼してくれた。父親はその後覚錯剤の中毒で服役中である。母親が家出する前迄、しっかり養育してきたのだと施設の職員の方の話である。また妹は幼稚園で同じ施設に入所しているが、知能は優れているが、性格的に扱いにくい点があるとのことである。大きくなって入所した子どもは、それまでどのように養育されてきたかということが、学業不振と関係があるように思われる。

㉔は知能指数94で全領域は低い。特殊学級に入級している。足の手術で入院したりなどで、学業不振になったということである。

㉔は知能指数が99で全領域の結果は低く、特殊学級に入級している。母親が第5子出産で死亡し、父親が上2人の子もだけ養育して、後は生活が安定するまで施設で養育して欲しいということで措置された。職員に友人のことを告げ口したり、万引き、夜尿がありチェック・リストではチェックされていないが、情緒的に不安定なように思われる。

㉔は㉔の姉である。知能指数99であるが、妹と同じように特殊学級に入級している。母が家出、父が県外に出稼ぎに出ているため措置された。全領域で平均より低いが51.4%となっている。学校の記録によると特殊学級では、リーダー的な存在のようである。

㉔知能指数81であるが全領域では平均より高く、学校の成績は5段階で国語2、社会2、数学3、理科3、音楽2、美術2、保健体育5、技術家庭4、英語2で、日常生活の行動からみて、知能指数がもっと高いのではないと思われるということである。

以上佐野良五郎案、学業不振の原因分類チェック・リストを行った結果と養護施設児の算数学力診断テストの結果学校の成績評価などと合せて事例研究を行って検討した結果、チェック・リストにより、要注意、異常と判断された者と学業不振との関係は顕著ではなかった。これはチェック・リストでの判定は学習者である子ども自身に原因がある場合に学業不振の原因となる子どもの状態をチェックすることは出来るが、子どもを取り巻く環境に属する環境的要因にある場合には有効ではないからだと思う。従って、学業不振児でこのチェック・リストで異常であるという判定がされない場合には、その原因が環境的要因によるものではないかと判断し、改善の対策を立てることが必要である。即ち、これまで、環境が原因で、未学習であった部分などを補習してやり、安定した環境で子どもが勉強できるようにすることが大切である。

V おわりに

養護施設1か所に入所している小・中学生につき、算数学力診断テストの結果、学校の成績、佐野良五郎案の学業不振の原因的チェックの結果につき、入所年齢を4群に分けて検討するとともに事例研究を行った。乳児院から入所した群には特殊学級に入級している者はいない上、算数学力診断テストの結果が平均より低い者が他群に比較して少ないという結果であった。

学業不振の原因的チェックにより、要注意・異常と判断された者と学業不振とのはっきりした関係は認められ

なかった。この結果から、養護施設児の学業不振の原因は環境的要因による者が多いと考えられる。学業不振に対する改善や予防もこの視点にたってなされることが有効であろう。

1 養護施設の本研究に対する御理解を頂き、資料を提供して下さいにつき深く感謝する。また、本養護施設は自然に恵まれた所にあり、子ども達も学校の友達と一緒に釣など楽しめる環境であるということであるが、そうした事も子ども達の心身の成長によりよい影響を与えているのではないだろうかと考えている。(本研究はプロジェクト研究で行った、学業不振の実態と改善に関する研究の一環として行ったもので、プロジェクトの연구원の方々と徳島県児童相談所 森依頭氏の御指導、御援助を頂いたことに深く感謝する。)

参考文献

1. 権平俊子他「情緒障害児等の学業指導に関する研究」日本総合愛育研究所 紀要 第14集 123 - 127 頁 1978年
2. 権平俊子他「情緒障害児等の学業指導に関する研究 第2報 遊戯治療に引続き学業指導を行った男児一事例」日本総合愛育研究所 紀要 第15集 71-75頁 1979年
3. 権平俊子他「情緒障害児等の学業指導に関する研究 第3報 教科学習と言語発達の関係」日本総合愛育研究所 紀要 第16集 215-222頁 1980年
4. 権平俊子他「情緒障害児等の学業指導に関する研究 I 発達障害を示した男子の13年にわたる追跡的研究 II 情緒障害児等の認知 言語発達および障害の改善に関する研究 1.言語発達検査 日本総合愛育研究所 紀要 第20集 261-275頁 1980年
5. 北尾倫彦 学業不振 1975年8月 田研出版
6. 佐野良五郎 学業不振児 1978年3月 佼成出版社
7. 佐野良五郎 君の勉強法ズバリ診断 1979年3月 佼成出版社
8. 清水利信 学力構造の心理学 1978年2月 金子書房
9. 田中博正他 学業不振児の心理学的研究 1977年9月 講談社
10. 徳島県児童相談所 養護施設収容児の学業不振児の原因と対策に関する研究 1987年3月

Research on Underachievement of Children
in a Home of Neglected and abused children.

— A case study of children in a home of neglected and abused children.

Tosiko GONDAIRA

This research had conducted on a home of neglected abused children (hereafter referred as "home"). The subjects of research are children housed in that "home": total of 31 children from first grade to seventeenth grade. To estimate the state of underachievement, all children are subjected to mathematics ability test. The results are compared with the report cards from school and the result of separately conducted test prepared for checking the cause of underachievement: this checking test is created based on the research of Dr. Ryogoro Sano.

Children are also classified into 4 categories by the age of admission to "home": (a) transferred from an infant home, (b) under 3 years old, (c) from 3 years old to 6 years old, and (d) over 6 years old. The possibility of correlation between the underachievement and the age of admission is estimated. Also case studies are conducted on each children.

The result shows that the group consisted of children accepted from infant homes displays most smallest number below the average of mathematics ability test score. Also no child in this group is accepted in handicapped class.

Some children are recognized as abnormal or requiring special attention by underachievement cause checking test. However, no correlation was found between the underachievement and the result of the cause checking test.

This clearly shows that the underachievement of home children is derived from the inferior environmental condition of home. If any improvement or prevention of underachievement is required, it should take the environmental factor into main consideration.

